

楽しい思い出は、すべての土台



「転入してブラスバンドに入ろうとしたが、レベルが高すぎて挫折した」と下斗米伸夫さん



「クラス対抗の百人一首大会の前には、初心者の男子を猛特訓しました」と藤本由香里さん

法政大学法学部教授でロシア政治が専門の下斗米伸夫さん(68、1967年卒)は、高校1年の途中で、父の転勤のため大阪から熊本高校に転入した。靴下をはいていないパンカラな生徒を見て目が点になり、校長先生が教育目標の「土君子」と強調するのを聞いて「待かよー」。カルチャーショックが大きかった。文学少年で、大学に進学しても文学を学ぼうと思っていたが、高校在学中に中国で文化大革命が起きるなど、世の中は政治の時代。国際政治に興味があつた。ただ、政治活動家のように熱を入れて国際政治を志す同級生もいて、「こういう人たちとは一緒にほできない。距離を置こう」と思った。

東京大学、同大学院で政治学を学んだ。旧ソ連(ロシア)を専攻したのは、北海道で生まれて6歳まで過ごしたという心理的距離の近さも影響した。学生紛争のために大学で授業が行われなかつたときには、「国家レベルでもっと大事なことがあるのにな」と感じていた。ロシア政治を、これまであまり注目されてこなかった宗教(ロシア正教)という切り口から見ると、「いろいろな面が新たに見えてくる」。今年で100年目を迎えるロシア革命も、宗教が大きく関わっているという。長年研究を続け、その道の第一人者といわれるようになった今も、「ロシアは『謎の国』奥深いです」。

小さいころから文学少女だった明治大学国際日本学部教授の藤本由香里さん(57、78年卒)は、ジェンダー論や漫画文化論などを専門とする。筑摩書房の元編集者でもあり、こうしたテーマの本を多く手がけた。きっかけは高校1年までさかのぼる。友人の姉に「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」の1節で有名なフランスの哲学者ボーボワールの著作を薦められた。それまで自分が女性であることが好きではなかったが、これを読んで「女を嫌だ」と思っていたのは、社会的にそう思われていたからだ」と気づいた。

東京大学に進学したが、当時、地元では「女で東大というのは、人生を狭める選択」と思われていたという。「一人で生きていってもいい、というような決意が必要だった」。大学卒業後、編集者として初めて自分で企画した本は、当時まだ新進気鋭の社会学者だった上野千鶴子さんが消費社会を分析する『私』探しゲーム―欲望私社会論(1987年)だった。初の自著は『私の居場所はどこにあるの?―少女マンガが映す心のかたち』(98年)。少女マンガを通して恋愛・性・仕事・家族など女性の価値観の変化を分析した。